

# Eureka IX

六年制通信 No.28 令和3年12月17日(金)号

## 難有

Panasonic の松下幸之助、この人は中学も出ていないのですね。それどころか9歳で丁稚奉公に出されているのですから、いわゆる学校で勉強をした経験はないわけです。いくら明治生まれでも、この年齢で親元を離れ(和歌山県から大阪の難波へ)奉公に出されるのは辛かったと思います。夜は布団の中でずっと泣いていたそうです。当時は尋常小学校が3年か4年で、これだけが義務教育、その上に尋常高等小学校が今の中2の年齢まででしたかな。9歳というと義務教育を修了しているかどうか微妙な気もしますが、それにしても母の恋しい年齢の子どもがもう働きに出ていたという方が驚きですね。こういう人の話を讀んだりすると、いつも学歴とは一体何なのかと考えてしまいます。Hondaの本田宗一郎も中学には進学していないはずです。お二人とも小さな小さな工場からスタートし、一代で世界に冠たる大企業に育て上げたのですから尋常一様の人生ではなかったはずです。彼らの目に映る人生というか世の中の仕組みというか、あるいは人間というもののはどのようなものなのでしょうね。

お二人とも共通して、ご自分に学歴のなかったことがよかったと言っています。念のために言いますが、学歴のない人は当時たくさんいたはずですが、ただそのことを成功の原動力にできた人は極めて稀だったと思います。ですから、成功するのに学歴は関係がない、という単純な話ではありません。

無学だったおかげで誰にでも教を請うことができた。知識がないので本当に素直に人の話を聞くことができた。しかも感心して聞くことができた。お二人とも同じことを言っています。これは確かに素晴らしいことです。特に心から感心しながら人の話を聞くと、聞かれた方は非常に気分がいいので、聞かれていないことまで教えたがります。いわゆる耳学問ですが、知識を身につけるには結局素直な心が必要だということを、このエピソードは私たちに教えてくれます。「知らないことを人に聞く」、これは言葉にすれば至極当たり前のことに聞こえるかもしれませんが、これが案外ね、想像以上に難しいことのようにです。特に学歴が高いと「そんなことは知っている」とつまらぬ見栄を張りたがるものらしい。正直に知らないと言うと「〇〇大学を出ていてそんなことも知らないのか」と思われる、そう考えるようですね。可哀そうに。また、周りの人も学歴の高い人には余計な期待をするわけで、「こんなことくらい知っていて当然だ」という目で見るとして、なかなか知らないことを知らないと言えないものらしい。諺に「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」とありますが、こんな諺があるのは、人はなかなか知らないことをその場で聞けないものだからでしょうね。

他に共通した考え方として、世の中には困難なことがあるという前提に立って生きている、しかも一般的には不運とか逆境とかマイナスのイメージしか持てないような事柄にぶつかっても、自分は幸運であるという発想をしています。本当に苦勞をした人はそんなふうに考えられるのかもしれませんがね。このあたり、私たちのような現代人とは根本的に違っているように思います。今はちょっとした不満にさえ我慢できない子どもと「子どもみたいな大人」が増えていますね。自分勝手に、己の無知を恥じることもなく、そして「公」に対する依存度が極めて高い、そんな人間が増えたと思いません。嫌なこと、自分の意に沿わないこと、そういうことは乗り越えるのではなく、そんなことがあるのがいけない、そう今の人は思っています。ですから、松下本田のお二人からしたら一体どこが不運なの、どこが逆境なのと言うであろう小さな小さな困難にも簡単に負けてしまいます。そして負けたのは自分のせいではなく周りのせい、困難や逆境が悪い、そういう風潮がありはしないでしょうか。ほんま嫌いやわあ。

生きていれば困難なことはたくさんある、難しいこともたくさんある、当然ある。それらを乗り越えるのは当たり前、いや一歩進んで、そういった困難を与えてくれたことに感謝する、そういう発想が見えます。お二人にはね。素晴らしいですね。

ある映像を思い出しました。キリスト教の教えに基づく、少年たちの更生施設が北海道にありましてね、そのチャペルの正面に「難有」という額が飾られているのです。

「難有」は（なんあり）と読みます。人生は困難、災難など「難」有りが当然、生きていくうちに降りかかる様々な「難」は誰であつても避けて通るわけにはいきません。

「難有り」を、文字をひっくり返して、「有難い」ことなのだと捉える心を養う、教会では恐らくそう教えているのではないのでしょうか。この教えは、人生に無駄なことはないという発想にもつながります。「難」に出会うたびに私たちの心は強く豊かになる、それは自分の人生にとって有難いことなのだと、そう思えるようになりたいですね。

## 今週のおすすめ

・川島 徹 『メーター検針員テゲテゲ日記』 (三五館シンシャ)

テゲテゲとは九州の方言で「適当に」とか「無理しないで」とか、そんな意味らしい。電気メーターの検針。皆さんの家にも定期的に検針員が訪れて、電気メーターを探し、表示されている数字を手持ちの機械に入力し、「お知らせ票」を印刷し、郵便受けに入れているはず。これ、知りませんでした、1件40円だそうです。

この人は40歳代でサラリーマンを辞め、作家になるべく文章修行をするがうまくいかず、50歳から10年間故郷鹿児島で検針員をしたわけです。60歳から10年は介護の仕事を転々とし、ようやくこの本を出したと。う〜ん。すごい執念ですね。他人の家に行くわけですからね、そりゃあ何かしらのトラブルは起こると思いますが、こんなにトラブルだらけだとは知りませんでした。著者は非常に詳しく書いています。犬に噛みつかれる、植木鉢を割ってしまう、あとで来いと怒鳴られる、中には絨毯を汚したと難癖をつけられ100万円を請求されたり…。一冊の本を出すだけの材料を体を張って手に入れたような、私はそんな感想を持ちました。

BGMは Le Couple の ひだまりの詩 でした…。